特集

刀剣研師

日本の文化を未来へつなぐ

かつて武士の魂だった日本刀は、今では日本文化を象徴する美術工芸品の一つとして大切にされています。実は、神栖とも深い関わりのある剣の伝承と、日本刀を守り次代へ伝える研師の世界をご紹介します。

日本に深く根ざした文化

相づちを打つ、助太刀、切羽詰まる、太刀打ちできない、単刀直入、つばぜり合い、抜き打ち、身から出た錆……。これらの言葉には共通点があります。それは何だか分かりますか？　答えは、どれも日本刀に由来する言葉。こうして挙げてみると、私たちが何気なく使っている言葉の中に、日本刀が文化としてしっかり根差していることが実感できます。

一方で、実物の日本刀は、いつでも見たり触れたりできるような身近な存在ではありません。しかし、近年はアニメやゲームをきっかけに、たびたび刀剣ブームが起こり、若い世代や女性、海外にも愛好家の輪が広がっています。

ところで、実は神栖市は刀剣と深い関わりがあるのをご存じですか？「古代の製鉄」「鹿島神宮の国宝」「日本刀を研ぐ研師」、この3つをつなぐ線をたどってみると、意外な関係が見えてきます。

神栖の砂鉄から作られた

刀は、鉄でできています。『常陸国風土記』には、古代の製鉄を語るときに必ず引用される有名な一節があり、「若松の浜の鉄を採りて、剣を造りき」と、若松の浜から採った砂鉄で剣を作ったことが記されています。また、「沙鉄は剣を造るに、大だ利し」と、剣を作るとたいそうよく切れるという記述もあり、神栖の海岸はかなり良質の砂鉄が採れる浜だったことがうかがえます。

注目されるのは崇神天皇の時、その鹿島神宮に奉納された年代が一致する点です。奉納された年代が一致することから、国宝「韴霊剣」が含まれているのではないかと推測されています。

韴霊剣は『古事記』の中で、神武東征の際に悪疫を退散させ、平和をもたらす特別な神剣として描かれています。鹿島神宮が所蔵するのは全長2・7メートルを超える長大な直刀（反りのない真っ直ぐな刀剣）で、製作年代は約1300年前と推定され、我が国最古かつ最大の剣として昭和30年に国宝に指定されました。

平成11年に、この韴霊剣を研いだのが神栖市の研師・細田邦信（雅号・光邦）さんです。今回は細田さんの細工場を訪問し、いろいろと話を聞きました。

後の人間国宝のもとで修業

まず、あまりよく知られていない研師の世界について、一から教えてもらいました。

父親が刀剣愛好家で、早くから研師に関心を持っていたという細田さん。後に人間国宝となる永山光幹先生に19歳で弟子入りし、神奈川県平塚市の永山刀剣研磨研修所に住み込んで修業をしました。

「永山先生は非常に寛大なお人柄で、弟子はもちろん他の流派にも技術を惜しみなく公開される方でした。何より日本刀を

間近で見ると緊張感に包まれる

神栖の海岸で良質な砂鉄が採れた

鹿島神宮

日本刀の状態を確認する細田さん